夜の死

ガムベース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の死

【Nコード】

N9419M

【作者名】

ガムベース

【あらすじ】

ベッドで眠る君を残して、私は思い出のショッピングモールへと向かう。私たちの家の目の前に、大通りをはさんでその店があった。昼間はにぎわうモールも、夜は明かり一つない。道路へ足を踏み出した瞬間、私はトラックに撥ねられて道路に転がった。やがて、私は死んでいく。

(前書き)

「小指」「諸行無常」という二つのお題のもとで書きました。

「夜の死」

いまこうして君の枕元にいるのが私だということが、不思議でならない。君はベッドの上で目を閉じている。私のことを畜生のように見るその大きな黒い目を、閉じている。こんな風に、君の前髪をそつと手ですくってみても、君は身じろぎ一つしない。前髪が瞼の上に着いたことにも君は気づかない。布団の下に隠された君の白い体を、いまは布団一枚で覆われている、その体を、私が、ついさっきまで掴まえていたその蠟のような肉体を、布団をはがして露わにしてみたら、寒さで目を覚ますだろうか？ どうしたら君は目を覚ますだろうか？

足が出ている。蒸し暑い外気の中で、二つの塊が石膏のように転がっている。くるぶしから下だけが私の目に映っている。指が十本ほんの少し甲高な君の足はまだ幼くて、成人の女性の足とは思えないほど小さく整っている。産毛が見える。爪の形がぼんやりと見える。ちゃんと十揃っている。

台所からグラスを出して氷を入れ、ベッドライトの薄明かりを頼りに、君のウイスキーを注いで少しだけ口に含んだ。君の寝顔を見ながら私は喉に広がる懐かしい血の味を、愉しみ、ふと目を覚ますと私の手にはなみなみと注がれたウイスキーがあつて、隣には君がケシの花のような笑顔で口元を、奇妙にゆがめ、その手には、私の手にあるものと揃いの、底の厚いグラスがあつた。君はグラスを高く頭の上に掲げていた。私はナイトテーブルに片手をついた傾いた体勢のまま、君の、漆黒の瞳をじいっと見つめて

窓から吹き込む夜風が涼しい。気がつくとき私の手には空っぽのグラスがあつて、ベッドの上には静かに目を閉じている君がいた。

軽くなつたグラスをナイトテーブルに置き、ガウンを羽織つて、

トイレに入つて用を足すと、サンダル履きで部屋を出た。ドアに鍵をかけて、私は家の前の大通りに出た。片側三車線の道路を、眩いライトを乱暴に散らしながら車が走っている。何台も。私はガードフェンスを乗り越えて、向こう側に渡ろうと思った。向こう側にはシヨッピングモールが建つていて、昼間はたくさんの人でにぎわう。真ん中の広場に大きな噴水があり、池には鯉が泳いでいる。夏場は涼しい場所を求めて噴水広場に人が集まり、人いきれで余計に暑くなる。今日もきつと満員だっただろう。私たちも越してきたばかりのころは頻繁に足を運んだけれど、君は物足りなくなつて、結局隣のもう一回り大きなモールに行くようになった。そのため私が免許を取つたようなものだ。いま、車のキーはナイトテーパーの引き出しに入っている。君もよく知っている場所だ。お互い好きなきに使えるように、置き場所を決めておいたのだった。

一人でシヨッピングモールに来たことは数えるほどしかなかった。引越してから君と初めて買い物をした、二度と君は来ないだろうこの店で、いつペンゆっくりと買い物をしたいと思つた。いまならきつと誰もいない。シヨッピングモールの敷地に明かりはなく、街灯だけが街並みを照らしている。通りに一歩足を踏み出し、クラクシヨンとライトが私の耳と目を突き刺したかと思うと、何か固いものに突き飛ばされた気がして

君が飽きてしまったのは、手軽すぎたせいかもしれない。歩いて一分とかからないところに思い出の場所があるのが、耐えられなかつた。そうやって遠くのものこそ綺麗だといつて手に入れようとするのが君だった。お揃いのカップで乾杯したあの夜から何年が経つたかわからない。自分の愛情の薄れからくる欲求不満を私の振る舞いに転嫁し、疑心暗鬼になつた君が握りしめた、鋭く輝くカップは君の寝顔の横にある。あの夜の私たちの痛みはもうすぐ消えてなくなるだろう。夫婦の営みのあと、君は突然狂つたようになって、私の腕を引つ掻き、噛みつき、厚底のグラスで私の指を一本叩き潰し、それ以来右手の小指は第二関節が曲がらなくなり爪は二度と生えて

こなくなつた。仕事に支障をきたした私が退職して、もうじき三年になる。貯金もそろそろ底をつくころだろう。

私はセミと人の渦の中で、温かい地面に横たわつて、私の顔をのぞき込むワイシャツの青年と、隣の奥さんを見ていた。挨拶をしようとしたが上手く口が動かず、せめて笑顔をつくらうと頑張つてみたが、顎に力が入らなかつた。ちよつと奥さんは？ ねえ、奥さんを呼ばないと！ ああ、妻は寝ているんですよ。起こさないであげてくれますか？

シヨツピングモールの建つ前、あの土地には公園があつたという。中央広場の噴水は公園に元々あつたもので、壊さずに残しておいたらしい。いつも親切にしてくれる、隣の家の奥さんから聞いたことだ。地元の人たちの希望だつたそうだ。風に乗つてしづきが飛んでくるたびに、私は彼女の言葉を思い出した。

噴水など残しても、公園がなくなつてしまつたことに変わりはない。気休めに過ぎない。悲しいことだけれど、どうしてだろうか、いまはそんなことを考えてしまう。何かを元のまま永遠に残しておくことなどできない。諸行無常なのだ。公園だつて、そして私たちだつてそうだつた。風景だつて、季節だつて、命だつてみるみる崩れ、簡単に、散つて、壊れて消えて、また生まれて、壊れる。

君の声が聞こえたような気がしたが、聞こえるはずのないことは私が一番よく知っていた。私の耳もそろそろ何も感じなくなる。青年の顔がだんだんと、黒に沈んで、街灯の明かりと月の明かりが混じり、暗い夜と明るい昼の絵の具が灰色に滲んで、私はグラスに太陽と月とを溶かして、君と乾杯した。乾杯。

(おわり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9419m/>

夜の死

2010年12月6日11時55分発行